



世界文学全集

パール・バック

大地

大久保康雄訳

河出書房

© 1969



カラー版 世界文学全集 第34巻

パール・バック 大地

昭和 42 年 7 月 20 日初版発行
昭和 44 年 7 月 1 日再版発行

訳者 大久保康雄

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

印刷者 澤村嘉一

印刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定価 850 円

製 本・和田製本工業株式会社
製 函・加藤製函印刷株式会社
本文用紙・三菱製紙株式会社
表 紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

目次

大地

第1部 大地……………	5
第2部 息子たち……………	173
第3部 分裂した家……………	411
年表……………	621
解説……………	627

巻頭口絵 パール・バック女史

© 1967 Time Inc.

本文カラーさし絵

マーサ・ソーヤー

© 1967 Martha Sawyer

装 幀 亀倉雄策

大 地

大久保康雄 訳

ヴァントゥイユは、こんなふうにしてあの短い楽節をつくったのである。この作曲家は、いろいろな楽器を用いて、この楽節のヴェールをはぎとって、それを目に見えるものとし、その構想をうやうやしくたどってゆくことに悦びをおぼえたのである、しかもその手ぎわは実に愛情にみち、実に慎重で、実に繊細、また実到的確だったので、音は、何かの陰影をあらわすためには柔らかにぼかさされ、何かもつと大胆な輪郭を跡づけなければならぬ時には活気をとりのどしながら、絶えず転調を重ねていったのだ、ということを感じとっていた。そしてこの楽節が現実存在すると信じたとき、スワンが誤っていなかった証拠ともなるものは、もしヴァントゥイユがああ楽節の形式を見出してそれを表現するにさいして、あれだけの才能を持ち合わせず、あちらこちらに勝手な思いつきの表現をつけ加えて、おのが視覚の欠陥や手腕の不足を隠そうと努めたならば、そうしたごまかしは、すこし耳のきく音楽愛好者には、ただちに看破されたはずだ、ということである。

ブルースト『スワン家の方へ』

第1部
大地

主要人物

王龍(ワンロン) 勤勉で土地を愛する貧農の息子。飢饉のとき南の都会で偶然手に入れた宝石をもとに、つぎつぎと土地を買い、大地主となる。王大人とよばれ、一家繁栄の礎をきずくが、終生土地への愛情を忘れない。

阿藍(オーラン) 大地主黄(ホワン)家の奴隷から王龍に買われてその妻となる。無口だが性根のしっかりした働きもの。夫を助けて忍苦の半生をおくる。

叔父 王龍の叔父。怠け者で、するがしこい男。匪賊ひぞくの副頭目となる。

蓮華(リエンホワ) 町の茶館の歌妓。王龍の第二夫人に迎えらる。

杜鵑(ドチュエン) 黄家の老大人付きの女奴隷。のちに蓮華の召使として王家に入る。抜け目のない女。

梨華(リホワ) 飢饉の年に王龍があわれんで買いつた美しい女奴隷。晩年の王龍の寵をうけ、その死後は主人の白痴の娘と孫のせむしの少年のめんどうをみる。

陳(チン) 王龍の隣家の農夫。

1

王龍が結婚する日であった。周囲にとばりをおろしたまっ暗な寝床のなかで目をさましたとき、彼には、この夜明けが、なぜいつもとちがうように思えるのか最初わからなかった。家のなかは静まりかえっていて、中の一隅をへだてた向こう側の年老いた父親の部屋から、弱弱しい、息づかいのせわしい咳がきこえるばかりだ。毎朝、最初にきこえるのは、この老人の咳だった。王龍は、いつもならそれをきき流し、横になったままで、その咳が近づいてくるときと、老父の部屋の扉の蝶番がきしむ音をきいたときしか動かなかった。

しかし、けさはそれまで待っていなかった。とび起きて、寝床のとばりをわきへ押しやった。まだ暗くて、ほんのり赤味を帯びた夜明けである。窓がわりの小さな四角い孔に貼ってある紙が破けて、ひらひらしているその紙の隙間から、ほの明るい赤銅色の空が、ちらとぞかれた。彼は孔のところへ行つて紙を引きはがした。

「春だもの、もうこんなものはいらねえや」

彼はつぶやいた。

せめてきょうだけは家をきれいに見せたいものだと思ふが、しかし口に出してさういうのは、はずかしい。その孔は、どうにか手が出せるくらい大きなので、彼は手を突き出して戸外の変な空気にふれてみ

た。やわらかなそよ風が、東からなごやかに吹いてくる。おだやかな、ささやくような、雨氣をふくんだ風である。吉兆だ。畑がみるのは雨が必要なのだ。ここ数日間雨がなかつたし、きょうもおそらく降らないだろう。しかし、もしこの風がつづいたら、二、三日うちには水が押めるだろう。よかつた。きのう彼は、こう日光が強くきらきらと照りつづけたら、小麦は穂がつかないだろう、と父親に話したものである。そしてきょうは、天が彼の幸福を祈つてこの日を選んだかのようにだ。大地は実を結ぶだろう。

彼は野良着の青いスポンをはき、青い木綿の帯を腰に巻きつけながら、急いで中の部屋へはいつて行つた。からだを洗う湯をわかすまでは上半身は裸のままだ。彼は母屋にもたれかかっている差掛小屋へはいつていつた。そこが台所になっているのである。その薄暗がりの向こうにあるとなりの戸口の隅から、牡牛が頭を突き出し、彼に向かつて低く鈍重な声で鳴いた。台所は母屋と同じように、自分の畑の土を固めた泥レンガで大きく四角に築かれており、屋根は自分たちのつくった小麦のわらで葺いてある。カマドもやはり、いまは長年の煮炊きで焼き固められまっ黒にすすけているが、祖父が若いころ自分の土地の土でつくつたものである。その土のカマドには深い丸い鉄の大鍋がかかっていた。

彼はそばにある土甕から、ひょうたんのヒシヤクで水を汲み入れ、この大鍋を半分ほど満たした。水は貴重なので注意深く汲み入れた。それから、しばらくためらつた後、とつぜん土甕をもち上げて、水を全部、大鍋にあけてしまった。きょうこそ全身を洗うつもりなのだ。母親のひぎに抱かれていた子供るときから以後は、だれも彼のからだを見たものはない。きょうは見られるだろう。きれいに洗うつもりなのだ。

彼はカマドの向こうへまわつて行つて、台所の隅に立かけてある乾いた草の葉や茎を一つかみとつてきて、一枚の葉もむだにしないように、たんねんに釜口につみかさねた。それから古い火打ち石で火を

出して、わらにその火を移した。やがて火は燃えあがった。

こうして火を起さなければならぬのも、けさが最後だろう。六年前に母親が死んでからは、毎朝、彼が火を起こしてきたのである。火をつけて湯をわかし、茶わんに湯を入れて、父親の部屋へもって行く。父親は寢床にすわって咳をしながら床の上の靴を探している。この六年間、毎朝、老父は朝の咳をしずめるための湯を息子^{こゝろ}が持つてきてくれるのを待っていたのである。これでやっと父も子も楽になる。女が家へくるのだ。もう王龍は、夏も冬も、二度とふたたび朝早く起きて火を起こさなくてもすむ。彼は寢床で横になって待つていられるのだ。彼のところへも湯を運んできてくれるだろう。そして、もし豊作^{とよさく}だったら、湯のなかへ茶の葉を浮かせることもできるだろう。数年前にそうだったように。

そして、女が年老いるころには、子供たちが火を起こすだろう。女は王龍のために、たくさん子供を生むにちがいない。この家の三つの部屋の内外を駆けまわる子供たちを考えると、その考えにうたれたように彼は手を休めた。母親が死んでからは家は半ばあいてしまつて、つねづね三つの部屋でも多すぎるように思えていた。家族の多い親戚が押しかけてくるのを、彼らは、いつもことわりづづけてきた——際限なく子供ばかり生んでいる叔父^{おじい}などは、言葉巧みにこんなことを言つたものである。

「やもめふたりで、こんなにたくさんさんの部屋は必要ねえだろうが。父子いっしょじゃ寝られねえのかね。若いもんからだのぬくみは、年寄りの咳には、たいへんいいはずだが」

しかし父親は、いつも答えたものである。「わしは孫のために寢床をとつとくのさ。孫が、わしの年老いた骨をぬくめてくれるだろうて」

いま、その孫の生まれるときがきたのだ。それも、たくさんさんの孫が……壁ぎわにも中の部屋にも孫どもの寢床がならぶだろう。家は寢床でいっぱいになるだろう。王龍が、この半分は空家同然の家が寢床で

いっぱいになることを空想しているあいだに、カマドの火は消えて、大鍋の湯は冷めはじめた。上着を引にかけてボタンもかけぬ老人の姿が影のように戸口にあらわれた。老人は咳をし、痰^{たん}をはき、息をぜいぜいわせている。

「どうしたんだ、わしの胸をあたためる湯は、まだ沸かねえのか」
王龍は、びっくりして父をみつめ、やつとわれに返つて、はずかしくなつた。

「焚物^{たきもの}がしめつとるで」彼はカマドのうしろからつぶやいた。「しめつぽい風が……」

老人は、ひっきりなしに苦しうに咳をしている。湯が沸くまでは、とまりそうもない。王龍は茶わんに湯をつぎ、すこし間をおいてから、カマドの上の棚にのつている光沢のある蓋^{ふた}をあげ、乾いて巻きあがつている茶の葉をすこしまみ出して湯のなかに落とす。老人の目が強欲^{きやうよく}そうに開き、すぐに叱言^{しごん}を言いはじめた。

「なんでそんなむだなことをするだ。茶を飲むなんて銀を食うのおなじことだぞ」

「きょうは特別だよ」王龍は、ちよつと笑つて答えた。「飲みなよ。気分がよくなるだ」

老人は、ぶつぶつ言いながら、しなびて節くれだつた指で茶わんを握りしめたが、もつたいたなくて飲めないらしく、湯の表面で巻きあがつた茶の葉がひろがるのを、いつまでも見つめていた。

「冷めちまうよ」王龍が言った。

「なるほど——そうだな」はつとして老人は熱い茶をすすりはじめた。おいしい食べものをもつた子供のように、すつかり満足そうであった。しかし、王龍が大鍋の湯を惜しげもなく深い木桶^{きづく}へあけるのを見のがさなかつた。彼は顔をあげて息子^{こゝろ}を見た。

「煙に水をやらにやいけねえだな、よく実るようにな」と老人は唐突^{からげ}に言った。

王龍は黙つて最後の一滴まで桶にうつした。

「その湯、どうするだ」老父がどなった。
 「正月からおれはまるでからだを洗ってねえだよ」と王龍は低い声で答えた。

嫁に見せるためにからだをきれいにしたいのだ、と父親にいうのは恥ずかしかった。彼は急いで台所を出て桶を自分の部屋へ運びこんだ。入り口の建てつけがわるいので、戸がはずれかかっている、きちんとしまらなかつた。老人は、あぶない足どりで中の部屋にはいつてきて、戸の隙間に口をあてて、わめき立てた。

「初手から嫁にこんなふうにはさせちゃよくねえだ——朝の湯には茶の葉を入れるし、おまけに洗うといえばからだ全部洗うなんて」

「たった一日だけだよ」と王龍は大声でどなり返し、それからつけ加えた。「すんだら水は土にくれてやるだ。そしたら、まるつきりむだにもなるめえ」

老人は黙ってしまった。王龍は帯をとぎ、着物をぬいだ。小さな孔から四角に流れこむ明りの下で、小さい手ぬぐいを熱湯にひたしてしぼり、黒いやせたからだを力を入れてこすった。空気は暖かいと思っていたが、からだか濡れると寒さを感じて、手ぬぐいを、ひんぱんに湯に入れたり出したりしながら早くこすっているうちに、全身から、かすかに湯気が立ってきた。それがすむと母親がむかし使っていた箱のところへ行つて、青い綿布の新しい着物をとり出した。綿のほいつた冬物でない、きょうはすこし寒いかもしれないが、からだがかきれいになると、急に古い綿入れを着るのがいやになつたのだ。いままで着ていた綿入れは皮が破れているし、よごれてもおり、孔から灰色の古綿がはみ出しているのだ。妻となる女と、はじめて顔を合わせるのに、綿がはみ出ているようなものは着ていたくなかつた。いずれば彼女が洗濯もし、つくろつてもくれるだろうが、最初の日だけは、どうもまずい。彼は青い木綿の上を着、スポンの上に同じ布地の長衫をつけた——一年に十日かそこら、祭日にだけしか着ない、唯一の長い着物である。それから背中に垂れている辮髪を手早く

ほどき、すわりの悪い小机の引出しから木櫛をとり出して、髪をすきはじめた。

父親が、ふたたび近づいてきて、戸の隙間に口をつけた。

「きょうは何も食わせてもらえねえのか」と老人は不平そうに言った。「わしみたいな年になると、朝、食うものを食わねえうちは、骨がまるで氷みてえになつてるだよ」

「いま行くよ」王龍は手早く、なめらかに髪をくしけずり、それを、ふさのある黒い絹ひものように編みあげながら答えた。

そして、すぐに長衫を脱ぎ、辮髪を頭に巻きつけてから、桶をかかえて外へ出た。朝食のことを、まるで忘れていたのだ。トウモロコシの粉を湯がいて、それを父親には食べさせよう。自分は何も食べたくない。敷居のところまでよろよろと桶を運び、戸口の地面に湯をあけた。そのとき彼は、からだを洗うために鍋の湯を全部使ってしまったことに気がついた。また火を起さなければならぬ。父親に対して、むかむかと腹が立ってきた。

(あの老いはれは食うことと飲むことしか考えてやしないんだ)と、カマドの焚口のところでつぶやいたが、きこえるような声では何も言わなかつた。老人に食事の世話をしやるのも、けさが最後だ。戸口の近くにある井戸から、ほんのすこしの水を桶に汲んできて大鍋に入れた。すぐ沸き立った。トウモロコシの粉を入れてかきませ、それを老父のところへ持つて行つた。

「晩にや米をたくだでな、おとつつあん」と彼は言った。「だから、けさはトウモロコシだよ」

「米は、ザルにいくらも残つてねえぞ」と老人は中の部屋のテーブルの前にすわり、箸で濃い黄いろいカユをかきまわしながら言った。

「そんなら、春の祭りにや、すこし食うのをへらすことにしよう」

と王龍が言った。しかし老人は聞いていなかった。騒々しく音を立てて、カユをすすっていた。

王龍は自分の部屋にはいり、もう一度青い長衫を着て、辮髪を垂ら

した。剃りあげた額から頬のあたりをなでてみた。新しく剃らせたほうがよくはないかな。まだ太陽は上っていない。妻になる女が待っている家に行く前に、床屋のある通りへまわって頭を剃らせる時間は十分ある。金さえあれば剃らせようと思った。腹巻きから、灰色の布地でつくった小さなあぶらじみた財布を引っぱり出して、金をかぞえてみた。銀貨が六枚と銅貨が二つかみほどある。父親にはまだ話していないが、今夜は親しい人々を夕食に招いてある。叔父の子の従弟と、それに父親のために叔父と、それから近所に住んでいる三人の農夫にきてもらうことになっているのだ。町から豚肉と小魚と栗をすこしばかり買ってくるつもりである。できれば南からきたタケノコや牛肉も買って、自分の畑からとれたキャベツといっしょに煮たいとも思うが、しかしこれは、油としょうゆを買ったあとで金が残っていいたらの話である。頭を剃らせたら、たぶん牛肉は買えなくなるだろう。しかし、まあいい、頭を剃らせよう、と彼は急に決心した。

老人には、なにもいわずに、彼は早朝の戸外へ出た。暗紅色の曉だが、太陽は地平線の雲をやぶって、小麦や大麦におりた露に光っていた。百姓の習性から王龍はすぐに他のことを忘れ、立ちどまって穂先を調べてみた。麦はまだ実がついていない。雨を待ち望んでいるのだ。彼は大気のおいをかぎ、心配そうに空をながめた。暗い雲、重たげな風、雨はそこにあるのだ。彼は線香を買って、地神の小さな祠にそれをささげようと思った。こんな日には神様にすがりたくなくなるのだった。

畑のなかの小道づたいに彼は急いで歩いて行った。近くの町の灰色の城壁がづらなっていた。その城壁の楼門をはいると、黄家という大地主の屋敷があつて、そこに彼の嫁となる女が子供のときから奴隷として使われているのである。世間ではよく、「大家の女奴隷と結婚するよりは独身でいたほうがいい」などと言っている。しかし彼が父親に向かつて、「おれはいつまでも女房を持ってねえのか」ときいたとき、父親は言ったものである。「このごろのように時世が悪くなつてくる

と、婚礼にも、たいへんな金がかかるし、どんな女だつて、いっしょになる前に金の指輪や絹の着物をほしがらだで、貧乏人は奴隷をもらうより仕方がねえだよ」

そして父親は思いきつて自分で黄家へ出かけて行って、あまついでる女奴隷はいないだろうか頼んでみたのである。

「あまり若くねえ女奴隷で、何よりもべっぴんでねえ女を」と老人は言った。

王龍は、べっぴんであつてはいけぬ、というのが不満だつた。他人が祝ってくれるような美しい女を女房にできたらどんなにいいだろう、と思ったのだ。父親は不平そうな彼の顔つきを見てどなりつけた。

「べっぴんの嫁なんぞもらつてどうしようというだ。野良で働きながら家の仕事もすれば子供も生む、そういう女でなくちゃいけぬえ。べっぴんの嫁で、そんなことができるか。そういう女は着るものと顔のことしか考えてやしねえだ。この家には、べっぴんはごめんだ。わしらは百姓なんだ。それによ、大家のきれいな女奴隷に生娘がいるなんて聞いたこともねえだ。若旦那がたが、みんな手をつけちまうだ。べっぴんの百番目の男になるよりも、醜女でも最初の男になるほうがいいじゃねえか。考えてみなよ、きれいな女が、金持ちの若旦那のやわらかい手と同じように、土百姓のおまえの手をよるこぶと思ふか。女を慰みものにする連中の金色の肌と同じように、おまえの陽やけした面を好くと思ふか」

王龍だつて父親のいうことは百も承知だつた。それでも返事をする前に感情の高ぶるのをおさえられなかつた。やがて彼は乱暴に言った。

「いくらなんでも、あばたとみつ口だけはごめんだぜ」

「どんなのがくるか、まあ、もらつてからのことさ」と父親は答え

た。とにかくその女はあばたでもみつ口でもなかつた。それだけはたし

かだが、それ以上は何もわからなかった。彼と父親は金メッキした銀の指輪を二つと銀の耳輪を買い、父親がそれを婚約のしるしとして女の所有者の家までとどけた。それ以上は、きょう行けば女をもらえらるという以外、妻となるべき女については何も知らないのである。

彼は冷たく暗い町の楼門にはいった。水を運ぶ人夫が手押し車に大きな水桶を積んで一日じゅうここを出たりはいったりして、桶から石畳の上に水をこぼすので、土とレンガでできている厚い壁の楼門のトネルは、いつも濡れていて涼しかった。夏の日でもひんやりしていた。だから瓜の行商人は、この石の上にくだもの並べて、しめっぽい冷気のなかで瓜を割って食べさせるのであった。まだ季節が早すぎるので瓜商人は出ていないが、小さな青い桃の籠が壁にそってならべられ、商人が叫んでいた。

「春の初物だよ——はしりの桃だよ。さあ買った。さあ食った。こいつを食って腹のなかの冬の毒氣を追っ払ってくれ！」

王龍はひとりごとを言った。

(もし女が桃が好きなら、婦りに手に一杯買ってやろう)

婦りにこの門をくぐるとき、自分のうしろに女がついてくるということが、どうしても実感としてびんとこなかった。

楼門をはいって右に折れ、ちょっと行くと、床屋ばかりの通りである。まだ早いので、あまり人はいない。早朝、市で野菜類を売るために夜のうちに荷を運んできて、これから野良の仕事に帰ろうとする農夫がすこしいるだけだ。彼らは籠の上につ伏せになって、ふるえながら眠るのである。いま籠はからになって彼らの足もとにおいてあった。王龍は、きょうはだれからも冗談なんぞ言われたくないので、彼らにみつからぬように避けて通った。この通りには、ずっと向こうの端まで、腰かけを前において床屋がならんでいた。王龍は一ばん遠くにある腰かけに腰をおろして、隣の男と立ち話をしている床屋に合図した。床屋は、すぐにやってきて、火鉢にかけてある湯沸かしからシンチュウの鉢に手早く湯を注ぎはじめた。

「全部剃りますかね？」と職業的な口調で言った。

「頭と顔をたのむ」と王龍が答えた。

「耳と鼻の孔の掃除は？」床屋がたずねた。

「そうすると、いくら余分に出せばいいかかね？」と王龍は用心深ききかえした。

「四銭だね」黒い小布を熱湯につけて、それをしばらくしながら床屋が答えた。

「二銭にしてくれ」王龍が言った。

「それじゃ耳と鼻の孔は片方だけですぜ」床屋は即座に言いかえした。

「耳と鼻の孔は、どっち側のをやりますかね？」そう言いながら彼は隣の床屋に顔をしかめて見せた。隣の男は、げらげら笑いだした。王龍は、こいつはえらいいたずら好きの男につかまっと思った。しかし彼は、つねづね町の人たちには、なんといいこともなく劣等感を感じていた。だから、相手が、ただの床屋で、最下級の人間にすぎないと思っても、やはりひきめを感じて、つい早口に言ってしまったのである。

「どっち側でもいいですだ——どっち側でも——」

そして彼は、床屋がせっけんを塗ったり、こすったり、剃ったりするがままになっていた。この床屋は冗談こそいうが気前のいい男なので、特別の料金もとりもせず、じょうずに肩をたいてくれ、背中を筋肉をほぐしてくれた。彼は前額部に剃刀をあてながら王龍に話しかけた。

「辮髪を切っちゃまったら、いい男前になりますぜ。辮髪を切るのが最新流行でしてね」

頭の上にまるく残っている辮髪のそばで床屋が剃刀をひらひらさせるので、王龍は悲鳴をあげた。

「おやじに聞いてからでなくちゃ切るわけにゃいかねえだよ」床屋は笑って、そこだけまるく残して剃ってくれた。

それがすんで、床屋のしなびた水だらけの手に、料金をかぞえてわたすとき、王龍は、一瞬きくりとした。こんなにたくさんとられるのだ！しかし、ふたたび往来を歩きながら刺りたての皮膚にさわやかな風を感じると、彼は、ひとりごとを言った。

「たった一度のことだ」

それから彼は市場へ行って、豚肉を百五十匁ほど買い、肉屋が乾いた蓮の葉でそれを包むのを見まもっていたが、やがてちょっとためらいながら牛肉を五十匁ばかり買った。葉っぱの上でゼリーのようにふるえてる豆腐まで全部買いとどえてから、ローソク屋へ行って、線香を二束買った。それから、ひどくおずおずと、黄家のほうに歩を向けた。

黄家の門前までくると、彼は恐怖にとらえられた。どうしてひとりできたのだろうか？ 父親でも——叔父賢でも——隣家の陳でもよい、だれかにいっしょにきてもらえばよかった。彼はこれまで大家の門内へはいったことがなかった。腕に婚礼のごちそうをかかえたままはいって行って、「女をもらいにきました」なんて、どうしてそんなことが言えよう。

彼は門を見つめて長いあいだ立っていた。大きな黒塗りの二つの木の門扉は、いかめしく鉄の飾り紙をちりばめて、びたりと固くしまっていた。石造の獅子が二頭、門の両側に、この家をまもるかのよう立っていた。そのほかにはだれもいない。彼は身を返して歩み去った。とてもだめだ。

急に王龍はめまいを感じた。まずどこかで何か食べよう。まだ何も食べていなかった——食べることを忘れていたのだ。小さな安食堂へは行って、テーブルの上に二銭おいて腰をおろした。黒光りする前掛けをつけた小ぎたないボーイがそばへ寄ってきた。彼はボーイに向かって言った。

「麵を二杯くれ」そして麵がくると、竹の箸でがつがつと口のなかへ押し込むようにして食べた。そのあいだボーイは真つ黒な親指と人さ

し指で、銅貨をいじくりまわしながら立っていた。

「もってですか？」とボーイは、そっけなくきいた。

王龍は首を振った。すわり直して周囲を見まわした。この小さな、暗い、そしてテーブルがごたごたおいてある食堂には知っている人はだれもいなかった。ほんの数人が何か食べたり茶を飲んだりしているだけだ。ここは貧乏人ばかりくる場所なので、彼らのなかでは彼は小ぎれいで、清潔だし、裕福そうにさえ見えた。だから通りすがりの乞食が彼を見かけて哀れっぽい声を出した。

「ご親切な旦那さま、いくらかでも恵んでやってくださいまし——腹がすいておりますんで」

王龍はまだまだかつて乞食から物ごいされたこともないし、旦那と呼ばれたこともない。彼はうれしくなって、一銭の五分の一にあたる銅貨を二枚、乞食の鉢のなかへ投げてやった。乞食は爪のまっ黒な手のぼして、すばやく銅貨をつかみあげ、ぼろ着物のなかへしまいこんだ。

王龍はすわっていた。太陽が高く上った。ボーイはいらいらとそこら歩きまわっていたが、「もう何も注文しないのなら」と、ひどく生意気な調子で、とうとう彼は言った。「席料をいただきたいんですかね」

王龍は、そのあつかましさにむっとしたが、立ちあがりたいたいにも、あの豪壮な黄家へ行って女をもらうことを考えると、野良で働いているときのように全身に汗がふき出すのであった。

「茶をくれ」と彼は弱々しくボーイに言った。そちらをふり向くひまもなく、すぐにボーイは茶を運んできて、じゃけんに要求した。

「銭は？」

王龍は気が進まぬながらも、腹巻きから、もう一銭、出すよりほかはなかった。

(まるで泥棒だ) いまいましげに彼はつぶやいた。そのとき、今夜の婚礼に招いてある近所の人が店へはいつてきたのを見て、大急ぎでテ

「ブルの上に銅貨をおくと、茶を一口に飲みほして横手の戸口からすばやく外へとび出し、もう一度街路に立った。

（行かなきゃしょうがあるめえ）彼は絶望的にそう自分に言い置きかせ、ゆっくりと、大きな門のほうへ歩きだした。もう正午を過ぎていた。門は半開きになっていて、食事をすませた門番が竹の小楊枝で齒をせせりながら、門のわきに、のんびりと立っていた。左頬に大きなほくろのある背丈の高い男で、そのほくろから、一度も切ったことのない長い黒い毛が三本たれさがっていた。王龍の姿を見ると、籠をかかえているので行商人だと思つたらしく、乱暴にどなりつけた。

「おい、なんの用だ？」

やっとの思いで王龍は答えた。

「わたしは百姓の王龍です」

「うん、百姓の王龍が、どうしたというんだ」と門番は、さかねじをくわせた。この男は主人と奥様の富裕な友人をのぞいては、だれにも礼儀正しい態度をとらないのである。

「わたしがきましたのは……わたしがきましたのは……」王龍は口ごもった。

「おまえがきたのはわかっているよ」門番は、ほくろの長い毛をひねりながら、もどかしそうに言った。

「こちらに女がいます……」王龍の声は力なく低いさきやきとなくなつて消えた。

陽光に照りつけられて彼の顔は汗に濡れていた。

門番は大きな声で笑いだした。

「そうか、おまえか！」彼は大きな声で言った。「きょう花むこがくるからと言われていたが、籠なんぞかかえてくるからわかんなかった」

「肉がすこしはいつていますので」王龍は門番が案内してくれるのを待ちながら弁解がましく言った。しかし門番は動かなかつた。とうとう王龍は心配そうに言った。

「ひとりではいつて行ってもいいですだかね」

門番は大きき恐怖の表情をして見せた。「そんなことをしたら、老大人に殺されちまうぞ」

そして王龍がなんの気もつかないらしいのを見て言った。「いくらかその銀貨がものをいうというわけさ」

王龍は、ようやく、男が金をほしがっていることに気がついた。

「わたしは貧乏人ですだ」彼は訴えるように言った。

「腹巻きは何がはいっているか見せてみな」と門番が言った。

単純な王龍が、ほんとうに籠を敷石の上におき、長衫をたくしあげて腹巻きから小さな財布を引っぱり出し、買ひ物の残りの金を左の掌にあけて見せると、門番は、さすがに苦笑した。銀貨一枚と銅貨十四个である。

「銀貨をもらつとくぜ」門番は平気な顔でいう。そして王龍が抗議するひまもなく、もう銀を袖のなかに入れてしまひ、大きな声でどなりながら門のなかへ大股にはいつて行つた。

「花むこだ！ 花むこがきた！」

王龍は、いまの銀貨のこともしやくにさわるし、彼がきたことを大声で触れまわられることも身のすくむ思いだったが、門番について行くよりほかに、どうしようもなかった。そこで籠を拾いあげて、右も左も見ずに、彼のあとについて行つた。

豪族の屋敷へ足をふみ入れたのはこれが最初だが、あとになって考えても、なんの記憶もなかった。燃えるように顔をほてらせ、うつむいて、前を触れてゆく門番の声を聞き、四方から起こる笑いの声を聞きながら、いくつかの中庭をつぎつぎと通りぬけた。中庭を百も通過したように思えたころ、急に門番は口をつぐんで、彼を小さな待合室へ押しこんだ。ひとり立っていると、どこか奥のほうへはいつて行つた門番が、すぐにもどつてきて言った。

「老夫人がおまえをつれてくるようにとおっしゃつたぞ」

王龍は歩きだした。すると門番は彼を押しとどめて、うんざりした

ようにどなりつけた。

「おまえは腕に籠をかかえたまま、えらい奥様の前に出る気か——それも豚肉や豆腐のはいつている籠をよ。おまえ、どうやっておじぎをするつもりだ？」

「ごもつとも……ごもつともで……」王龍はどきまぎして言った。しかし、何か盗まれるのが心配で、籠をおろさなかつた。豚肉百五十匁と牛肉五十匁と小さな池魚と、これだけのごちそうをほしがらぬ人間がこの世にいるとは、彼には夢にも思えなかつたのだ。門番は彼の心配を見抜いて軽蔑した調子で言った。

「ここのお屋敷みてえなところじゃ、そんな肉は犬に食わせているんだぜ」そして籠をひたたくって部屋のかなかに投げこみ、王龍を前に押しやった。

長い廊下をふたりは歩いて行った。屋敷は美しい彫刻のある柱でささえられていた。王龍がまだ見たこともないような大広間へはいった。彼の家くらいの建物なら二十くらいはそっくりはいってしまふほど広く天井も高い。彼は上をむいて、すばらしい彫刻のある、きれいに彩色されている梁を、びっくりりして見あげながら歩いていたので、戸口の高い敷居につまずいて、門番が腕をとってささえてくれたのだったら、あやうく倒れるところだった。門番は、すぐく言った。

「老夫人の前へ出たら、いまみたいに地面にへいつくばるくらい、ていねいにおじぎをするんだぞ」

ひどく恥ずかしかつたが、どうにか気を落ちつかせて、前方を見ると、部屋中央の高座に、非常に高齢の婦人が腰をおろしていた。小柄な、きゃしゃなからだを、真珠のように光る灰色の繻子の着物で包んでいた。かたわらの低い台には阿片のキセルがあり、小さなランプが燃えていた。老夫人は、やせた、しわだらけの顔に、猿のように小さい鋭い、落ちくぼんだ黒い目で、彼を見た。キセルの片端を持って、いる手の皮膚は、かばそい骨の上になめらかに張っていて、金箔をぬった仏像のように黄いろい。王龍は膝をついて化粧瓦を敷いた床の上

に頭をすりつけた。

「立たせなさい」老夫人は重々しく門番に言った。「そういう礼儀は必要ない。その男は女を迎えにきたのか？」

「そうでございます、老夫子様」門番が答えた。

「なんでその男は自分で口をきかないのかね？」老夫人がたずねた。

「ばかなのでございますよ」ほくろの毛をひねりながら門番が答えた。

そこで王龍は立ちあがった。そして憤慨して門番をにらみつけた。

「わたしはいやしいものでございます、老夫子様」と彼は言った。

「高貴の方のまえで、どういう言葉を使ったらいいか、わからねえのです」

老夫人は非常に威厳のある態度で注意深く彼をみつめ、何か言おうとしたらしいが、奴隷が差しだした阿片のキセルを手にしたとたん、彼のことなど忘れてしまったように見えた。一瞬、身をかがめて、むさばるようにキセルを吸うと、その目の鋭さが消えて、忘却の霧でもかかったようになった。王龍は、彼女の目がふたたび彼をとらえるまで、その前に立ちつくしていた。

「この男はここで何をしているのかね？」彼女は、とつぜん怒ったようにたずねた。まるで何もかも忘れてしまったかのようにであった。門番の顔には、なんの表情もなかった。黙って何も言わなかった。

「わたしは女をいただきにきました。老夫子様」王龍は驚いて言った。

「女？ なんの女？……」老夫人が言いはじめた。かたわらにつき添っている女奴隷が身をこごめて何かささやくと、老夫人はやっとわれに返った。「ああ、そうか、ちょっと忘れていたよ——とるにも足らぬことなのでね——おまえは阿藍という女奴隷をもらいきたのだね。あれは、どこかの百姓と結婚させる約束をしたのをおぼえている。おまえがその百姓か？」

「それがわたしです」王龍は答えた。